

一般教育の英語(1) : タスク活動

高 橋 守

1 はじめに

英語を教える者にとって、学習者に英語を習得させたいという思いは共通していても、英語を教える上で抱えている問題点は、学校や個人毎に異なっている。まずカリキュラムの問題がある。最新の英語教授法を、どう受け止めて学校のカリキュラムにどのように反映し、どのようにそのカリキュラムを組み立てて行くかは、大きな課題である。また個別の授業のレッスンプランをどう組み立てて行くかという問題も、日々英語教師を悩ませる問題である。過去の英語教育の歴史を振り返ると、文法訳読法に始まり、オーディオリンガル法が教授法の主流であったが、今はコミュニカティブ・アプローチが主流となっている。コミュニカティブ・アプローチは、学習者が意味の伝達を中心とする活動を行うことを柱とした教授法である。この教授法への変化は、単語や文法の学習から流暢さの習得へのシフトをもたらした。更にまた個別の項目を学習させる synthetic な方法から、文や談話の全体を見させて、それを分析させる analytic な方法へのシフトをもたらした。日本では、現在でも高等学校に於いて英語の流暢さよりも大学受験を突破するための文法や単語の知識が重視されているため、文法訳読法が行われている。そのため、大学に入学して来る学生の流暢さのレベルは決して高いとは言えない。文法訳読法にはそれなりの利点もあるのだが、不利な点が多い。それに対して、本学の授業では英語の文法問題に強くなるための教育ではなく、本当に英語の4技能(読み、書き、話し、聞く)を身

に付けさせることを目標としたカリキュラムを組んでいる。それ故本学の授業では文法だけでなく、単語だけでなく、特定の場面に関する英会話(空港、レストランなど)だけでなく、それらすべてが総合的に組み込まれたタスク活動を中心とした教育が行われている。本稿は、あらゆるレベルの学生が参加出来るタスク活動を中心としたアプローチによる教授法の実践レポートである。

2 英文法指導中心から、英語使用を最大化する指導中心へのシフト

筆者は去年まで数回に亘り、英語テストの方略の考察を通して英語教育・学習方法にアプローチしてきた。読解、語彙、聴解、作文という順に概観してきたが、英語テスト方略の考察対象として最後に残しておいたのが、英文法である。

英文法問題の対策を論ずる本は、巷に氾濫している。およそ英語試験対策を掲げた本で、英文法の解説を含まないものはないと言って良い程である。それらの本の中から、これは素晴らしいと言えるような本を取り上げて分析を行うならば、英検や TOEIC の指導の一助となるであろう。だがしかし、小さな論考に纏めるには、英文法はあまりにも膨大である。また世界中で使用されている focus on form という方法に代表されるように、現在では文法だけの集中授業ではなく、英語の4技能の練習中に、文法の練習を埋め込む傾向がある。focus on form の考え方では、1つの文法の法則(フォーム)を、学習者が帰納的に学習出来るようになっている。

英文法の規則の学習が英語の授業そのものだった時代から、今やコミュニケーション中心の授業が主流となっているが、変化の途中に、文法が軽視されすぎたこともあり、その反省から focus on form という方法が生まれてきた。focus on form は、1つの活動の中で1つのフォームすなわち文法の規則を教えるが、多くの文法規則すなわちフォームズを一度に詰め込むことはしないのである。

このように現代の英語の授業に於いては、英文法だけを重点的かつ網羅的に教える事は、教授法の主流ではなくなっている。ただし、英検や TOEIC などの英語能力テストすなわち proficiency test の受験者にとって、英文法の知識は必需品であり、英文法を重点的に学習することの必要性が、現在全く消滅したわけではない。

しかし、学習者がどのように英語を学ぶのかという第2言語習得の研究が、既に明らかにしてきたように、英語を母国語としない大人は、継続的な英語使用を通して、徐々に段階的に正しい英文法を使う事が出来るようになる。学習者が、途中の段階で犯す英語使用のミスは、文法的誤りではなく、中間語と呼ばれている。学習習得理論が示唆しているのはつまり、学習者は流暢さを身に付けて、然る後に英文法の正確さを徐々に身に付けるという事である。

筆者の担当している英語の授業に出ている大半の学生の英語能力のレベルは、lower intermediate level であるが、授業を通して流暢さを身に付けさせることを念頭において技能の訓練をすることにより、次の intermediate level 近くまで実力が向上する。

本学に於ける英語教授法の課題は、どのようにしたら流暢さを獲得させ、4技能を向上させ、適切なコミュニケーションが行えるよう教育できるかということである。本年度の研究は「英文法試験の方略研究」という以前に立てた予定であったが、以上のような理由により、どのような活動によって学習者に流暢さを獲得させられるかという観点から、授業実践において観察された事柄について述べることにしたい。

3 大きなタスク活動：ポスタープレゼンテーションプロジェクト

学習者にとって英語の4技能を習得できるかどうかは、それぞれの技能を最大限に使うことができるかにかかっている。英語を最大限に使用するためには、意味のある言語活動を行う環境を教室内に整える必要がある。英語の言語活動には様々なものがあり、それらの研究も近年盛んになってきているので、その成果を筆者の授業にも取り入れている。今年度担当の実践英語 I (この授業の目的を考慮して、筆者はこのクラスを英語で integrated skills class すなわち4技能を総合的に習得するクラスと呼んでいる)に於いて、筆者は次に示すように計画を立てて、ポスタープレゼンテーションを中心としたタスク活動を授業で実施した。

プロジェクトは幾つかの部分から成る。大別すると a. 読解、 b. 話し合いとポスター書き、 c. ポスタープレゼンテーション、 d. メモをとる、 e. メモのまとめと発表の反省会、である。

a 読解

学習者は、4~5名のグループ毎に200~300語程度の記事を受取る。それぞれのグループの中で、どのようにその記事をポスターに組み立てるかについて、話し合いをする。これらの記事は、タイム誌とナショナル・ジオグラフィック誌から選んだものを使用した。この選択については、良い面と悪い面があった。良い面は、話題が学生の知的関心を満たすものであり、退屈ではない様子だったことである。悪い面は、やはり本物の英語はレベルが高すぎて、読解に思ったより多くの時間を取られてしまったことであった。次回は、例えばリーダーズダイジェスト誌などの、平易ながら学習者が興味を持てるような素材を選びたいと考えている。

b 話し合いとポスター書き

学習者たちは、ポスターの中身について話し合いを行い「ポスターが発表の際の『原稿』になるように」という指示の下に、ポスターの元になる図を作成した。ポスターの目的は、聞いている人に情報を素早く伝達することである。従ってポスターの文字の大きさやイラストの有

無についても考慮しながら、ポスター作成が進められた。ポスターの中に鉛筆で書き込むことを許可することによって、大きな見出しとイラストだけでは表現できない細かな説明を可能にしたが、グループによっては、十分な情報を入れなかったり、大きすぎる情報を詰め込んだりと様々であった。

c プレゼンテーション

学習者全員が英語で話せることが目的であるので、とにかく全員がプレゼンターになるようにという指示をした。この指示は守られたが、ポスターを『原稿』にするようにという指示は、守られなかった。つまりポスターおよび発表を聞いている人を見ながら話をせずに、手元の記事をそのまま棒読みにしたグループもいた。これらのプレゼンテーションの様子は、全てデジタルビデオで録画された。事前に attention getter について説明し、発表を聞く人たちの注意を惹く方法を教えた。attention getter はプレゼンテーションを始める時の切り出し方のことで、定義、短い逸話、一連の疑問文、一般的な言説などを用いて聴衆の注意を惹く技術だが、初めて経験するプレゼンテーションで、この技術を使うことのできたグループは少なかった。しかし、質疑応答の場面では全て英語で応答が行われていた。流暢さの観点から言えば、学習者達の発表と質疑応答は成功だった。

d メモをとる

事前に note-taking の方法を指導しておいた。一般的には note-taking とは、聞いたことの全てを書くのではなく、重要な点を探して書くことだが、これについては守られていたと思われる。なぜなら学習者のとったメモが、概ね簡潔に見えたからである。学会などで行われるプレゼンテーションは、一回限りなのだが、英語を学ぶためのプレゼンテーションなので、ビデオの録画を収録後すぐに見せる方法を取った。それに伴って理解が進んだ可能性も十分にあると考えられる。しかし、目の前のポスターを書き写してただけのグループもあった。これは、あとから提出させたレポートとポスターを比較して分かったことである。結果としては、全ての学習者がメモを取る事、すなわち note-taking の技術を身に付けているわけではないことが分

かった。

e メモのまとめとプレゼンテーションの反省点

全てのプレゼンテーションが終了してから、全員に2つの課題を与えた。各グループで話し合いを行い、それぞれの課題の答えをグループ毎に提出させた。1つ目の課題は、他のグループの行ったプレゼンテーションの内容をまとめて、1枚のレポートとして提出すること、もう1つの課題は、自分たちのグループのプレゼンテーションの良かった点と改善すべき点についてまとめて、1枚のレポートにすることである。いずれのレポートも、学習者の英語力の限界に阻まれて、小さくまとめたものが多かったが、何よりも特筆すべき点は、退屈なはずのレポート作成すらも、学習者が協力しあうことで喜々とした学習活動になったことである。受動的に学ばされているはずの学習者が、能動的に文書作成を進めている姿には驚かされた。しかも学習者が流暢に書いていたことが、短時間で作成された全ての文書が英語で記述されていた事から分かった。

f 発表後の感想

ポスタープレゼンテーション終了後、グループ毎に発表を振り返って話し合いをさせ、それをまとめてレポートとして提出させた。プラスの面では、次のような感想が学習者から寄せられた。原文は英語で記述されていた。「上手に訳せた。」「ポスターが上手く行った。」「簡潔に出来た。」「比較が上手にできた。」「効率よく仕事を分けたので、各々が発表できた。」「発音が良くてよかった。」「文字が大きく書いて、見易かった。」「想定された質問に答えられた。」「発表が単調にならずに済んだ。」

またマイナスの面では、次のような反省であった。「もっとはっきり話すべきだった。」「もっと表情がにこやかな方が良かった。」「もっと数字をいれられたら良かった。」「もう少し詳しく説明すべきだった。」「聴衆の方を向くべきだった。」「絵を入れるべきだった。」「言葉についての説明がたりなかった。」「ポスターにもっと内容を盛り込めばよかった。」「聴衆を惹き付けるために短い話を作るべきだった。」

英語でまとめた発表を行うのが初めての学

習者ばかりであったことを考慮すると、学習者全員がプレゼンテーションのプロジェクトをやり遂げたのは、経験を積んだという点で非常に意味があったと考えられる。また全ての学習者が、発表、質疑応答、まとめのレポートの記述を全て英語で行うことが出来たので、彼らの流暢さをかなり高めることができたと考えられる。

4 小さなタスク活動

ポスタープレゼンテーションは、クラスのサイズによって費やす時間はまちまちだったが、概して準備に数週間分の授業を必要とし、発表とまとめも数週間かかる。それに対して、もっと小さなタスクは、1授業時間分の枠内で完了することが出来る。そのような小さなタスクの中で、実際に実践英語 I (integrated skills) の授業に中で使用したものを次に報告する。

a First Impression

ペアでおこなう。この第一印象というタスクは、第1回の授業で用いる。はじめに学習者に向かって、全く知らない人と隣同士で座るように指示する。次に互いを良く観察するように指示する。それから予め配布したプリントに相手の印象を書き込ませる。プリントには、This person's hobby is _____ のような書込欄を作っておく。趣味を尋ねる以外にも、例えば好みの色、音楽、将来の夢、スポーツ、特技、英語学習の動機などの項目を作る。例えば学習者Aは、パートナーとなった学習者Bを観察して、このプリントに This person's hobby is reading books. と書き入れる。各々がプリントに記入し終わったら、今度は互いに書いた内容を口頭で確かめる活動を行う。例えば、学習者Aは、学習者Bに、“Your hobby is reading books.” と言い、それに対して学習者Bは、“You are wrong. My hobby is collecting stamps.” のように言う。プリントの全ての項目について同様のやり取りを行う。この活動を含めて、学習者個人の興味に関する内容を作文させると、学習者の個人的な興味を知る事ができる。よりよく学習者を知って、指導者と学習者との距離を小さく保ち、彼らを励まして、育てる事が重要であると考えられる。

b スゴロク board game

グループで行う。紙面にスタートからゴールまでの多くの区画を描き、その区画の中に英語の質問を入れておく。学習者は、サイコロを振り、出た目の数だけ進んで止まった所にある質問に答える。質問は、教員が作成したものを使えばすぐに使用できるが、空白の紙を用意しておいて学習者に書かせると、英文を作る練習になる。学習者の実力に応じて、長い答えでも短い答えでも、どちらでも良いので、流暢さを養うには最適の方法である。

c 英語で記事の内容を話す AB stories

4～5名のグループで行う。メンバー全員に、1人1人異なる文章のコピーを配布する。なるべく難解なものを避けて、平易な英語で書かれたユーモアのあるものを選ぶ。学習者は与えられた記事を読んで、次の授業までにその記事の話を他のメンバーに英語で話すことが出来るようにしておくように指示をする。このようにして予習してきた話を、授業では伝言ゲームの要領でメンバーに順番に送ってもらい、最後に話を始めた本人に話が戻って来た時に、どれくらい元の話と違っているかを見る。このタスクは、話者とそれを聞いている他のメンバーが近くにおいて、何度も同じ話を聞いて話すことを繰り返すので、どのレベルの学習者でも無理なく参加することが出来る。

d メモがとれるようになるコツ note-taking suggestions

ペアで行う。プリントに一般的なメモの取り方を英語で簡条書きにして配布する。一度使って不要になったコピー用紙(使用済みの小テスト用紙が最適)を細く切っておき、1人あたり5枚配布する。プリントから細い紙片に重要だと思うノートの取り方の項目を書き写させる。5枚の紙を見ながらペアの人に自分の考えを述べさせる。レベルが心配な時は、ホワイトボードに I think ~ is important because... という構文を書くと、誰でも楽に自分の考えを述べる事が出来る。今まで配布したプリントの項目としては、1. Think before writing. 2. Prepare for the class. 3. Notes should be brief, legible, and consistent. などがあるが、筆者自身これらの項目をさらに改良しなければ

ならないと考えている。

e 英語の歌について作文

グループで行う。罫線入りの紙を配布する。それぞれの思い出の曲について英作文をさせる。20分間程度書かせた後、自分の書いた物を隣に手渡しさせる。数名先まで送らせて、全員に他の人の書いた文章を持たせる。各々その文章を読んで、感じたことともう少し知りたいと思うことを英語で書き込みさせる。これが済んでから、英語の歌を使用して歌詞の dictation を行う。

f 映画の場面を使用する

ペアで行う。量的に見て映画1本を全部教材にすることに尻込みする英語教師でも、プリント1枚分の映画の場面ならば、1授業時間で十分扱うことができる。DVDの字幕をプリントに写して、学習者が授業でその場面のスクリプトを読めるようにする。理解度をチェックするクイズを作成して、映画のスクリプトと共にプリントに入れておく。映画の場面を数回見せた後で、ペアの人とクイズの答えについて話し合いをさせる。

5 おわりに

本稿では、授業で学習者に英語を最大限に使用させるために行っているタスク活動の実践報告を行った。

始めに、なぜ英文法中心ではなくタスク中心にシラバスを書くことになったのかについて触れた。英文法の断片的な知識を与えてそれらの知識を統合させるアプローチよりも、継続的な英語使用によって段階的に英語が身に付くということが、近年の英語習得理論研究でも明らかにされていることが、英文法中心からタスク活動中心へと向かうべき根拠となっているのである。

2番目に、授業で取り上げたポスタープレゼンテーションについて触れた。ポスターの内容となる資料の読解から、ポスターを用いた発表後のまとめまで、一連の活動を通じて、英語の4技能を実際に使用する頻度が極めて高かったが、学習者は喜んで活動した。学習者自身のペースで、意味を考えながら発表を行い、発表を聞

いてメモをとる、という一連の活動は、学習者に満足感を与えたようである。このことから分かる通り、英語教育に於いては、英文法学習のような機械的な活動よりも、クラスメートとのコミュニケーションを中心とする活動によって授業に活気が現れ、学習者が意欲的に学習に取り組むことが確認された。

3番目に、種々の小さなタスク活動について触れた。a 第一印象、b スゴロク、c 英語で記事の内容を話す、d ノートを取るコツを学ぶ、e 英語の歌を利用してコミュニケーションを行う、f 映画の場面を利用して話し合いをさせる、というようなタスク活動について報告した。

タスク活動を通して見えてきた第1の課題は、学習者に必要な学習スキルを修得させることの必要性である。一般的に学習スキルとは、例えば授業中に聞く講義の内容をノートにメモをとったり、さらにそのメモを教科書その他の必要な文献と照合して、学習するための資源となるノートを作ったり、さらにそのノートや配布物を整理して、学習のために使えるようにしておけるような技術の意味で使われる。高等学校までの教育でノートを取るなどの学習スキルを身に付けて来てほしい。しかし、学習スキルが身に付いていないまま入学して来た学生を、このまま放置する訳には行かないので、これからは学習スキルが身に付くようなタスク活動を考案する必要があると考えている。

第2の課題は、タスク活動を行う時に教材として扱うべき適当な素材を集めることの必要性である。難解すぎる教材は、学習者が学習目標を達成することの妨げとなる場合が多いが、逆に簡単なこと、例えば空港やレストランでの会話練習のような事ばかりをやっているのは、授業の内容が浅薄になってしまいがちである。英語教育の目的を考えた場合、それは流暢さの養成そのものにあるのではなく、適切なコミュニケーションができることにあると考えられる。適切なコミュニケーションというのは、英語使用の上で正確さのみを重視するという意味ではなく、英語を駆使して必要なことを受容と伝達ができることである。適切なコミュニケーションができるようになるためには、技能的な訓練の他に

内容的な事柄の学習も必要とされる。この事に関して既に英語教育として研究されている分野には、例えばグローバル・アウェアネス (global awareness: 海外の人たちの暮らしに関する知識を持つ事) や C B I (Content-based Instruction: スキル中心ではなく、内容中心の英語教育へのアプローチ) がある。これらを取り入れて、学生が英語でのコミュニケーションに必要とする知的レベルを高めてゆくことこそ、大学レベルのコミュニケーション教育に必要とされる事柄であろう。今年 of タスク活動の実践を通して、学習スキルとグローバル・アウェアネスと C B I を取り入れる事の必要性が見えてきたが、これらについての実践報告は、次回以降に稿を改めて行おうと考えている。

参考文献

Books

- Benson, P., & Nunan, D. (eds.) (2004). *Learners' Stories*. Cambridge: Cambridge University Press
- Celce-Murcia, M., Larsen-Freeman, D. (1999). *The Grammar Book*.

(2nd ed.) Boston: Heinle & Heinle

Doughty, C., & Williams, J. (eds.) (1998). *Focus on Form in Classroom Second Language Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press

Ellis, R. (1997). *Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press

Frodesen, J., & Holten, C. (eds.) (2005). *The Power of Context in Teaching and Learning*. Boston: Heinle & Heinle

Oxford, R.L. (1990). *Language Learning Strategies*. Boston: Heinle & Heinle

Journal Article

Koprowski, M. (2004). Strategies of Communication: The Power of Strategic Competence and the Need for a Focus on Form. *Modern English Teacher*, 13, 5-15.

単行本

高島英幸編著. (2005). 『文法項目別 英語のタスク活動とタスク—34の実践と評価』大修館書店.

竹内理. (2003). 『より良い外国語学習法を求めて』松柏社.

寺内正典・木下耕児・成田真澄. (編) (2004). 『第二言語習得研究の現在』大修館書店.